



淀屋形金雞新

特別
13
3521
2



西 13
號 3521
卷 2



金雞新話卷之二

強賊惱諸家

東武岳亭主人跋



斯^かり^ろの^ら吾^あ妻^ま屋^や一^い家^けの^ゆろ^ろろ^ろく^く寃^む屈^くの^四非^び小^こ陥^ち
り^て暗^{あん}夜^やの^と燈^{とう}火^かを^失へ^るごと^く慄^ま然^{ぜん}と^して^日を^あら^う
敷^あき^らし^ると^さら^らぬ^ぬ或^あ夜^や半^{はん}ご^ろ慌^あ忙^{ぼう}と^して^門の^戸を^を
敲^{たた}く^{もの}あり^奴子^こ岡^{おか}付^けて^起出^でそ^も何^{なん}方^{ほう}より^来ぬ^ぬ
し^くめ^て又^{また}何^{なん}の^用あり^て斯^{かく}深^{せん}更^げ小^こ鼓^こき^あら^うと^さら^らぬ^ぬ
ぞ^と問^とふ^と門^{かど}を^たら^して^者を^召合^あへ^て云^いや^らう^と口^{くち}の^聲を^きき^と
の^命を^受て^来ら^う者^{もの}ら^う急^き小^こ湊^{みなと}家^けの^ゆの^小鼓^こを^きき^ぬ



わんわんわん
ののの
ののの

昭和二十九年
七月九日
昭文

問へ兒子細あり疾々岡よと呼りけりけりぬぞ下僕らうち
 ころ死慌忙のそ死門の戸を引明せは是のうぬ縣令
 どの使ぬありて其さる醜く死打扮しう大漢子
 とも數十人一度おちり手ぬ手ぬ得ぬのを引さけ
 て家内の者を打仆し下僕らを追ちりし主官どもを
 引去りて頓て奥藏小尋ひりて有とある金銀を
 のころまぐ泣血まぐ何死ともまぐ逃去りその夜を
 此二く小雨ありて路のそど潤ひりりりぬぞ置の上
 一圓の足跡まぐ残りりり少時ありて家内の者ども
 漸々人心地つれて旦縛めりりり者どもを解りて死

期てそりり一邊を見まかりりりり愛小一箇の傘を
 まら置りり把揚てひりり見れは是尼屋木平次が
 家の傘ゆて尼木の二字を写りりり主官ども大い
 小忙を其夜明ぐり縣令の廳お訟へ言けり左門
 の佐どの是を岡を翌の日尼屋木平次を召ひりりり
 しく責問めひりりり尼木も又是実ぬ知さる更りり
 を更ぬ此と覚えりりりりと御答へ言けり其云死
 泣言りりりり光景ありけり左門の佐との夕時りり
 を願けりりり頓て東作を圍圍より引りりり二人
 向ひて日ひりりり御小尼木が奴子ら打倒して三方兩

と奪ひ取りし東作らら死爲ぬあはば亦昨宵吾妻
屋にお入りて彈家を聞げせ黄白を奪ひ去りもま
是尼木らら死爲ぬ有ト是の極めて別小盗賊あ
つて豫て東作が死持の副刀を盗まおた此一件の空
子をあつて暗まぬと尼木を追うけ打作して三万
兩を奪ひとり盗まおたつ副刀を其場お捨ちたて
東作ぬ罪ともつ亦昨夜の吾妻屋小乱入して数千
兩の黄金を盗ま尼木が家の雨傘を残りおたて木平
次らを罪ぬ陥さんとほつ奸計つ五口遠く此偷
賊を捉へて休ホダ身を明くゆるはるぬが此後双方

とこの管さど争ふるつと異々と説き上りあひ二人を
免して飯させしるぬのつぬを東作尼木の左門の佐
の恩を謝し頓て吾家ぬ帰けり然してより左門の
佐の下司の者ぬ命して其偷賊を捜さむとつ
女奴賊殺主人
斯て又二月余りを経て後吾妻屋東作京の方ぬ急
用ありて行つるが此程の新未ぬぬぬ信やうる
主管余五平とらる者を二人僕して朝巳の時をう
ぬ立出るる然して其日も空しく暮て其夜三更ごろ
とも思ひた頃ぬ吾妻屋が門口を慌忙しく敲く者

あり裡より奴子が誰ぞと問を外面あり大音めて余
吾平より一大隻の起りしを引返り来りし疾く
と明らむと叫びわらふ奴子の駭き戸を開けを
余五平の大方よりぬらして總身血まきしふ二三が處
薄疔をおの血ぬきぬらして東作が死骸を肩み引け
醜くひまろ一箇の切首を手ぬきけて大息つたくとん
でり内君のおたまきばや言上りた大音ありと呼り
けりぬぞ東作が妻娘の雪児ら奥の間より起りてま
と東作が死骸を見て大い駭け是とも如何なるま
ぞやと其俎死骸み取つたてまをくたけりぬ泣けり余

吾平の二人が前み控と座し小生主人の御僕して京
とさうして急し處み路のほど彼是と問どうしと救
方のやうより天晩み及びせめてかき入泊るべしと夜
道を走りて行くとぬ八幡みちうた堤の一邊まはり
松の間より四五人の次血賊ありしので御主人をけりて
大袈裟み伐りしに小生おろりた一刀を引ぬたて彼盜
賊らを相敵ゆりて四方み當つて働けども彼方の大せ
吾の一人竟み主人の殺されぬらひ擔兒金銀の残りま
奪ひ取ると偷賊どもは皆逃さるぬ小生のやうくと二人の
偷賊を伐みせて其首の討取られども主人御果あじえ

何百目小家小あつ内室へ言説る五吾も俱め自
 言せんと刀の手に掛るんと斯て御主の御亡骸を
 老鳥鳥小食せん更最本意ありあつと思ひ又け一件
 の光景を知らせあつ人無れがをわぬ命をる人
 御死骸を引捷げやう帰候ふらう今の内室御寮人
 へ御主の死骸を渡進せ此告る上か陽侍思
 ひ置て速く小自害して死出三途の御供せんと刀を
 ちりて抜放し既小腹を切んと傍小居合は主官ごも奴
 子も俱み走らう右左より押止め是短慮らう余吾平は
 足下今死らうとも主君の蘇生するふゆあは死あ

易く生への堅く古人の教へ今の命をる人入て内君御
 寮人の力とらう御家の相續をとる活業助け今死
 らう尚勝る忠義ふこそ侍のめと言語を尽して諫め
 らぬの余吾平も漸々小止まりける妻と娘の臥あるひて
 歎き小正体あらうけり斯て主官ごもりの日の一封の訴
 牒をまらめけよ縣令の聽みか出たれが縣令官大
 滝左門の佐是を歩てまはく駭き近頃小佛太郎とい
 る罰盗ありてけ近國を横行し人家小あ入財室を奪
 ひ人を殺して金銀を掠めらる更幾許といふ敷をまら
 五吾達らう此盜賊を尋み出ら民の歎きまらべと



余よ
吾平
暗夜
主人
東作
を殺す

今迄新言集

其

日ひて且吾妻屋が主管らの飯さぬらう

縣使捉奸賊

窮鬼類を集め福神友を會せと善きとも重く悪きこ
ともまゝに重なる者ぞうゝ吾妻屋東作をりめ淀ふあ
る時娘雪兎を中將どの御嫁君とさきんとあひい
るどの勢ひまゝ中將どの明をさせさるひてよう玉若
どのの行方まをば居まより東作あひあへて浪花の地小
大家さめとめ許若の黄金まつのやゝ其後古井の怪小
あひて年未くくゝ金銀財宝のさうさく土中埋
又庄木より預りて三万金も同じ井の中小陥沈ま其換

小吾死持の金三万兩を尼木小りゝ損失又尼木その
こがみ中途中めて偷賊小奪りぬゝより東作小疑ひか
つ暫く囚圍小つまがれ其留主小刑盜おゝの右と在
黄白さる奪ひ去れと今の家のとく貧しくさう活業のみ
しづり死處小又忽ち東作のかる横死とこげらる小運家
のるがに大さるゝは然れとて奈何とも捨おれがゝ東作
が死骸をのかる若く野邊の送るをさし法要ねかゝら
小活業さう然りて後の主管とめ皆いさる遺し余
吾平のさげが小主の敵の盜賊一人さうとも討取らる者さ
しバ旦迹小残り置外小下推二人さうりを止置らる其後

京淀^{きやうでん}とてこの一宗^{いちそう}の人々^{ひとびと}集り来り東作^{とうさく}が後室^{ごしむ}と娘^{むすめ}の
 雪児^{ゆきこ}ら小向^{こむかひ}ひてのふやう今^{いま}の斯家^{かきや}も貧しくもうしむを
 唯^{ただ}めての世渡^{よわた}りも烏^{くわ}がくかゝん娘^{むすめ}御^{おん}の人並^{ひとら}お抜出^{ぬきだ}しつる
 容^{よう}見^みよりそれ^{それ}が能^よ知^ちずがゆとえへびて相續^{さうじく}し左^{ひだり}も右^{みぎ}も
 して活業^{かつぎ}とてうしつる人と云^いつるゆぞ母^{はは}の娘^{むすめ}の賣^{ばい}めと兼^{かね}
 引^ひ夫^{つま}より智^ちを尋^{たず}ねてくるが其^{その}頃^{ころ}の古井^{ふるゐ}の裡^{うち}より夜^よ
 く一^{ひと}道^{みち}の光^{ひかり}物^{もの}あつるをさるゆぞ諸^{もろ}人^{びと}是^{こゝ}に見^みて吾^{わが}妻^{つま}屋^やか
 家^{いへ}の妖怪^{ようかい}ありと取^とりて誰^{たれ}か一人^{ひとり}智^ちめりんとこの者^{もの}
 る一^{ひと}斯^かての今^{いま}の詮^{せん}方^{かた}をうと再度^{また}人^{ひと}々^々より集^{あつ}りて然^{しか}も疾^{はや}
 この家^{いへ}を賣^{ばい}ちつひ其^{その}金^{かね}をめて田舎^{いんや}へ引^ひこつて淳^{じゆん}世^よと安^{やす}く

送り玉^{うりたま}へとらぬぐと勸^{すす}めたる母^{はは}も娘^{むすめ}も是^{こゝ}れは從^{したが}ひ既^{すで}に家^{いへ}
 をの賣^{ばい}んとしけるを余^よ五^ご口^{くち}平^{へい}字^{まじ}て一^{ひと}宗^{そう}の人^{ひと}を一^{ひと}邊^{へん}おまひ
 ぎ密^{ひそ}めりふやう過^{あや}さう玉^{たま}の東^{とう}作^{さく}を許^{ゆる}若^{わか}の黄^{わう}金^{きん}を
 つのや一^{ひと}経^{けい}營^{えい}めりけ家^{いへ}を今^{いま}むさくといふ手^て小^こ渡^{わた}さんこ
 本^{ほん}意^いとらぬべうに去^さ頃^{ころ}八^{はち}幡^{ばん}めて一人^{ひとり}の盜^{たう}賊^{ぞく}を伐^きて
 即^{すなは}座^ざ小^こ主^{しゅ}の誓^{ちか}言^{げん}を討^{うち}とめり忠^{ちゆう}切^{きつ}を思^{おも}ひぬるが願^{ねが}ひ
 る小^こ性^{じやう}をうて雪^{ゆき}児^こ君^{きみ}の智^ちとてうしつるゆぞ人^{ひと}然^{しか}あつん
 めり小^こ生^{せい}が本^{ほん}国^{こく}丹^{たん}波^はの一^{ひと}宗^{そう}のめと下^{した}より一^{ひと}宮^{みや}や二^{ふた}厘^{りん}のこがみ
 を借^{かり}来^{きた}り此^{この}家^{いへ}を眼^めつて遠^{とほ}うに原^{はら}の豪^{かう}家^かふるはへく
 侍^{さむらい}よあつて是^{こゝ}れを湯^ゆ洗^{せん}せりといふと頼^{たの}みけしつる一^{ひと}宗^{そう}の人^{ひと}これ

を学て是れゆゑとも能く更らうと思ひ頓て母と雪児ゆは
 変をまらめらぬが母のたのふ打情ひ速う此変を整へん
 とのひらるるを雪児のさうめ美引は一向ひきまて断りけるを
 一宗の者と母親と口ハ管さうめて止さうらむと雪児も右
 を詮術さう然るを左も右もさうめんと吞へらるるあご母も
 一宗も竹天をさうめとまよう吉辰をさうめて婚姻の日を
 定めらるる左右して婚姻の日ゆらうらぬを朝まらうたよ
 支度を整へ酒肴を調和して日の暮らるるまで待ひらるる斯
 て夜ゆらうらぬを余吾平の満面ひきまを合へ今宵ひご
 室の山とさう関たて七十五日生延ると天の逆許とた立

て不血をぞ待てびらる一宗の人々母親の晝のゆらう奥
 の室をまらうらひ屏風さう引廻し置らう初更過るこ
 ろゆらひ余吾平の衣服さう下爽う小打扮て本室の中
 央小座さうとさう石也と思へ詮方さう雪児も装束束
 ららめて此正堂小出んとはる時急卒小外の方さうか
 く上意さうと呼りつて縣令の官人大勢一度ゆ乱れゆら
 奥正堂小居らうける余吾平を捉捉へ高千小手小繩
 をかけ引立々々出行らうけ光景小一宗のゆらう母も
 娘も驚き忙と抑何ぞも辨へは一向戦ひて居らうけ

ろ

大滝捜副盗

縣令大滝左門の佐の袒子の者を吾妻屋小遣して余
 吾平を搦めしり廳前小社居させ縣令自ら茶ちり
 まつて出て余吾平小向ひ謂て曰く汝の天下小横行
 強盗の首領小佛太郎が部下ろく我のさう思
 み所ありて隊兵の者小分付て汝を縛めしり
 小の戸木が主を管らるを打付て三万兩の黄金を奪ひ
 其後又吾妻屋が空居小あ入数千兩の黄白を盗み
 去せしも此皆是你が手引るる速く小自首せし
 小於て水火の拷問小あつびても自首せし置べし

と緊しくは辞小余吾平のいと忙りたる面色小て
 ちりくと流し小生身小らうて更小覺えりた冤屈の
 罪をかゝる物ろる吾偏の主のめ小忠義を重んじ
 一命を鴻毛よりも軽んじて去頃の小もて次血賊と
 戦ひ眼前主の仇を討て人小も知し侍る者を那そや
 盗賊の手引るるの思ひもよろぬ直小こそ侍と嘲顔
 小言上りたるを左門の佐阿々と打笑ひ寔小偷人丈々
 しての汝ろるを都て人盛んる時小天小勝天定まへて人
 を制はと汝一度の多くの者を討りしつゝつ小見小頭ろる
 時ろるんや你強て争つ吾今その怒首を見まへり

うろ誰りある其者こそと呼り玉へ阿のり入て豚
兵の面々一人の野臥り非人と覺えけ汚氣る漢兒を
引立来り余吾平が一邊ぬ推居る當下左門の佐威
丈島ふりて余吾平を礎と疾視るんぢ目外主人東
作が供ぬつたて洛陽ふ趣んとて八幡の邊りゆて東
作が由断をうわひ後身より一刀ぬ伐殺し路費の金
を奪ひたり傍ぬ臥居る野依りの非人を刺殺し其
首を伐て盜賊の首よりと啞言吾と我身ぬ其首爰
疵つけ主人の死骸を擔ひ歸り吾妻屋一家のゆめ
を味々と奸計あやせ娘雪兎と妻とて甘大一家を

奪んとぬ女奴討つぬも知まんとと思ふべからど天ぬ口を
人を以て言しむると今扯出せけ非人汝が女奴惡
を残り見あれて今日訴へいぞぬが頼ぬ汝をぬ提
り速くぬ自首せよと責らむる彼野臥り余吾平ぬ
向ひ你のぞや主人を殺し吾友らちの塞八といへる非
人を刺殺し其首を伐て死骸を川へまげ落し主人
の死骸を引くづき塞八が首をさげて逃ましその時
吾の四五軒くぬ人ぬ在て元来暗夜のころぬ汝が眼ぬ
見つろねが殺さることを適ぬる又東作が伐ぬと
き取落し提灯の風ぬぬる其火影ぬ你が面を

よく見えおたぬ余の汝は暴悪の憎くぬが疾よりの官府
ふ訟へんとの思ひはれども得と休が居死をも見とてけ
然して后小訴へると今まで打捨ちたる死小今朝友
ごちの非人かゆふの今日吾妻屋小の婚礼あむこの
祝残を貰ひの行と教小任せて行て見とて昔乱離と
見うけ休が面影儲を爰ぞと思ひ立て今將にぞ
く訴へ出て明友の塞八がゆふ仇をむらふ逆うつと
言うる小ぞ流石の余吾平是を破て一言返言言語も
るく黙然としてさく俯臥左門の佐まる余吾平小向
ひ汝尚疑ひたること種々あり日外主人の定紋木目図の

つたつ副刀を盗むのせも汝が死為るべく又名古
の濱辺ふて斤木が二万兩の黄金を奪ひの五日妻屋が
家小あ入て数千兩を盗むも皆るんぢが死為るるへ
然り甘き時の大勢めて働きと岡ぬさくが休同黨あり
小疑ひる速く吐実せよと喝もる人を其時余吾
平頭をわらげ今何をる包を待かん太何ゆの主人東
作を殺し非人を斬るるとの吾為業小侍へとも副刀を盗
ミ斤木が金を奪ひるるの更の努めおのむがまらる鬼
みて侍ふるると吾へかろを左門の佐尚叱つて曰く汝然まで
小陳ぶるとの吾も云さで置べたる此どの彼奴を裸小して

御新行古巻二

台目

水食せよと指揮しけむと心て隊兵の者ども大勢
て立ち上り余五平が衣服を奪ひ赤裸みきける余
吾平が慌鼻禪みきり一箇の木札を結び付て
左門の佐と目疾く見つけ其札を奪ひと云ふれば組兵
の者これを把て左門の佐に渡しける縣令これを左視右視
て忽ち小膝を奪ふと打て是めておめひ合はる度あり先
の年長柄のちとて一個の小嚙囉をとらへり其盜
賊小ざら一箇の木札をゆり其仔細を責問し近來
この邊り小隠れり小佛太郎といへる強盜の麾下なるよ
し彼木札の山寨の隠家へ出入はる圍札るよし自首す

おらびり尚其賊寨をも回落さんと思ひ一箇小佛の
偷夫やと死て竟見ふ今まで其果元を知り由る今又
此木札を見り其時を奪ひ圍札と一点をみ度る茲
を以てその時の汝も彼小佛の麾下の賊小極くは餘云
はとて云さでやの置へりくとまよひ日と母の手大く責め
らるふぞ余五平今の絶ぐこや思ひ多ん竟見ふ彼未白の圍
の副刀をぬききり古下り名古の濱めて己木が金三万両
を奪ひ副刀を捨ちた東作を罪おちり圍圍の裡に
くまき又五平妻屋にお入て数千金を奪ひしめ吾
うこより頭領する小佛太郎へ内通して大勢を呼よせ



て次皿を去せ侍ふるりと逐件自首ぬあつびくる小ぞ左門
の佐重ねて然るを小佛太郎が巢穴をも云ぶくと主夏ら
しつら余五平平答つていみやう彼小佛太郎の或時の山小
柵あると死の船小住のづこと柵家を定ぬが今何処とぞ
言うがと彼木札の途めて黨小出會るとは同類の
相違る死との入證の割符めて殺て山寨へ出入する関
札の侍のぼと云て又更小是さ自首せは然るも左門の
佐増々歳々拷問ぬかけらとらるぬぞ余五平今を身
体つと命ぬ危く見えふ多ぬが左門の佐且まわく拷
問ぬらぬ葉をあつて神のせ堅く獄屋の裡小駭系は番

の者をつけおれて蔵へ是を守らせらう

奸賊獄遁去

五平妻女屋が家内ぬはは度をも因て大ぬ駭き余五平
の新赤うらまぐら目取信やうらる者と思ひぬぬが既ぬ雪見
か聲と爲んとせしふ思ひまや斯る盜賊とんとせし
危死とらうらりと舌を震ひて怖れふらうまの備ぬあは
縣令の邸ぬの図圖長る堤八平太とのみ者左門の佐が
命を受て許すの番士と諸儀ぬ余五平をりぬあはら
図圖を蔵へ守らうら折ぬも春の日の長やうらうら小
益過る頃と思しきふ勿心ち図圖の堀の外ぬ一人の高人土巴

うろく洞酒をめきびや御着小の京物お人物刺味さめ
 まを好ませるもの物の侍を酒の伊丹池田めて各々
 る酒を遠くつむが一盃さししめて討つてあつた高やう
 小呼りつ小ぞ八平太の是を答て日来好めるさつば頓小
 呼入て是を見ろ小其器も最清らゆつて種々のさつを
 針小盛盒子小畜へ彼是と取りつて八平太小進めけ
 小の八平太の口より涎を流し頓て一盃を傾るゆつと極
 けて蘭陵の美酒ゆつて尋常の酒小あつたさつと舌
 打つて数盃を飲めけ其價を償んとつ小燗酒ら
 つつ入て吾偏の近來このさつ入扱住る者さつとを

今日を初めつて日毎小茲小泰るる思つたつと
 小宛りて酒を好ませめつとさつと聖も又泰るる人價の
 つつめつても苦つて序の脚に玉の侍へ唯尊用をさつと
 願つたつとと正首をちていひ捨つ荷官さつとつて入つて
 まつぬ斯て次の日よりつて日毎あつたつて酒を賣つと
 允十日余りつ小つ小つ或日此酒商人例のさつと
 て酒を勧めつとつと序小八平太小向ひきをいふつと
 つつらつら我隣家小一個一医生ありて我日毎小爰へ商
 賣小つとつとを知て彼医師の云やう此程さつと其家の子
 めて勞疾を疾る人を療治さつとつつけ病を治せんゆへ人

贍を用ひざらうと死の速み功を奉りて幸あるまふ
 一日毎小園園へあきまひの性ゆめとせし小尚園園のち
 みて刑罪ふあへる者あへるそのけ生肝を買とりてゆ
 らし黄金のりふまうせて進らせん先その手附て
 田金十兩を渡り越せ願く大人此田金を受あは
 めの刑伐の人あへん時小生贍をとらうとあへんやと云て
 彼十兩を八平太が前ふさし置たるは八平太こそを見
 悟ぶと大うとまへに急し色をひそめて云々やうけりど
 一個の盜賊を較ぶらうけ賊は是彼小仏太郎が部下の賊
 ゆくて五目妻屋匠屋の両家を騒せしひとうとらうぬ強盜

るは遠くは刑伐小遭て必定せし倘渠刑せし時及
 かく我穴竊小屠兎ふ分付て渠が腹をあをらせ生肝を
 取て汝小遣さへたうとせめて彼酒商人の大の小籠こひ
 然しん小五目隣家の醫生も極めて歡びあへん然あ
 を且この黄花の受納めあへんと八平太ふ痴くはれが
 強慾非道の八平太のめらうは打よろこび傾て十兩の
 金を受をさめらまは酒商人あへん云やう廿二口を首
 尾よく買得て彼醫生ふ与うむむの骨折代を世
 みる然るがその前悦び小今日爰小携へ来り酒肴
 儀をさへば刀鉢達小まわらうと種々の肴を按排

て酒を勧めたるが八平太をどめ岡園を守る番士の面々
 豫て左門の佐が戒めたる詞をも打とれど其大壺小入
 て酒商人を相人とて措つ押つ酌交うく酒三遅小
 と飽と知は時をう有て天晩ふらう八平太を初めと
 して許々の番士も太く酔酒商人も酔多と果其
 座小有るそは次の間小這入て東面も知まて取らける
 斯て程るく一更の頃小及ひくるとは八平太目を覚し頻
 らふ番士らも呼起せど一人も應へをせは酒商人も同
 く酔やうふ起せど覚ばて臥息のまのまかぬびは
 く更小生酔るうらむは八平太も詮方なくその伏ふ捨

おたて俱小眠ふつたふくうなる芽小更の夜嵐小天王寺
 の鐘の音鏗々々として物実々々く早真夜半とあやう死
 頃彼酒商人もくと起四下の森息をうがういつ時分の
 ようと下立立て措箱の裡より短刀を抜い忍び足小
 さし寄寄て八平太まさ殺し竊小門の戸をづく戸扇を
 左右へ推ひつた呼子の笛をとうのうて飄々として吹立
 ちけけ方の葦蔭彼方の隈より覆面頭中面を隠
 く忍び次々の異形の曲者三人五人あつらひて何う叫さ
 点頭あひ皆のりともめ裏めりつ終小岡園の鏡ねり切難
 るく余五口平をゆけ出一人が背に拵ひく曲者どもをうくと

何^{なん}死^しとも^もま^まく^く逃^に去^げと^とろ^ろ酒^さ商^か人^{にん}を^をと^とめ^めは^は軍^{ぐん}の^の目^め是^こ小^{せう}
 佛^{ぶつ}大^{だい}郎^{らう}が^が部^ぶ下^かの^の盜^{とう}め^めて^てお^おろ^ろ仲^{ちゆう}間^まの^の余^{あま}吾^ご平^{へい}を^をま^まと^とひ^ひ出^で
 と^と連^{れん}行^{ぎやう}の^のめ^めろ^ろひ^ひの^の鳴^{なり}乎^や八^{はち}平^{へい}太^{たい}が^が怠^{たい}慢^{まん}よ^よろ^ろ一^{いつ}盃^{さき}の^の酒^{さけ}に^に心^{こころ}
 を^を奪^{うば}ひ^ひ命^{いのち}を^を陥^{おと}は^はの^のま^まろ^ろと^と大^{だい}郎^{らう}の^の罪^{つと}人^{にん}を^を奪^{うば}ひ^ひ去^さる^る在^{まじ}
 薬^{やく}佳^け味^みと^と賊^{てく}り^りし^しの^の漢^{わん}土^ど人^{にん}の^の言^{こと}の^の棄^すて^て酒^{さけ}の^の善^よら^らぬ^ぬ物^{もの}
 小^{せう}ぞ^ぞ有^あり^り

淀屋形金雞新話卷之貳 早

